

Title	Bazar Hindustani : Simplified Basic Hindi
Author(s)	Koga, Katurō
Citation	大阪外国語大学学報. 29 p.59-p.67
Issue Date	1973-02-28
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80459">https://hdl.handle.net/11094/80459</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## Bazar Hindustani : Simplified Basic Hindi

बाज़ारु हिन्दुस्तानी : सरलीकृत बेसिक हिन्दी

सन् १७७२ में जार्ज हैडले ने हिन्दुस्तानी भाषा का व्याकरण ग्रंथ रचा था। तब हिन्दुस्तानी का आशय तथाकथित "बाज़ारु (बाज़ारी/चालू/ हिन्दुस्तानी)" से था जिसका व्याकरण हिन्दी अथवा उर्दू की अपेक्षा कहीं सरल और संचिप्त है। हिन्दी एवं उर्दू के विकासक्रम के अध्ययन के लिए इस ग्रंथ का महत्वपूर्ण स्थान है, हालाँकि इसमें व्याकरण का अंश अत्यल्प और शब्दावली एवं सम्भाषण के नमूने अधिक हैं।

इस प्रबंध के पूर्वार्ध में हैडले की "हिन्दुस्तानी" का स्वरूप तत्कालीन हिन्दुस्तानी(उर्दू), वर्तमान मानक हिन्दुस्तानी(जिसपर वर्तमान हिन्दी एवं उर्दू खड़ी हैं) तथा कलकतिया हिन्दुस्तानी(कलकत्ता की बाज़ारु हिन्दुस्तानी) के साथ तुलना करके स्पष्ट किया जाएगा। इससे "जार्गन" (Jargon) अर्थात् चालू भाषा का स्वभाव भी प्रकट हो जाएगा। इन कामों के सहारे प्रबंध के उत्तरार्ध में डा० सुनीति कुमार चाटुर्ज्या द्वारा प्रस्तावित "सरलीकृत बुनियादी(बेसिक) हिन्दी" पर चालू हिन्दुस्तानी तथा भारत की भाषा समस्याओं के संदर्भ में विचार किया जाएगा।

略 号

BH Bazar Hindustani (Hindusthani)

CD George Hadley, A Compendious Grammar of the Current Corrupt Dialect of the Jargon of Hindostan, with a vocabulary, 4 th Ed., London, 1796

CH S.K. Chatterji, "Calcutta Hindustani: A Study of a Jargon Dialect," Lahore, 1931 (Indian Linguistics, Vol. I, Reprint, Poona, 1966)

GH John Gilchrist, A Grammar of the Hindoostanee Language or Part Third of Volume First, Calcutta, 1796)

HG Duncan Forbes, A Grammar of the Hindustani Language, London, 1862

HP John Gilchrist, Hindoostanee Philology Vol. I, London, 1825

IAH S.K. Chatterji, Indo-Aryan & Hindi, Calcutta, 2nd Ed., 1960

SH Standard Hindustani (Manak Hindustani)

1. まずCDに用いられている綴字と音韻との関係を明らかにする。( ) 内がSHの表記法に改めたもの。説明の必要上、SHに意識したものを〔 〕内に示す。

(1)**a**:da (de:), (2)**ae**:aetbar (eytba:r) [ë'tiba:r], (3)**ai**:mainee (meini:) [ma'ni:], (4)**au**:j-  
uwaub [jawa:b], (5)**auo**:auor (a:or) [aur], (6)**aw**:awg (a:g), (7)**b**:bauhir (ba:hir), (8)  
**bh**:bhauloo (bha:lu:), bhote (bho:t) [bahut], (9)**ch**:chaur (c'a:r), chorena (c'horne:),  
(10)**ek**:tulluck (talak), (11)**ekh**:deckhta (de:khte), (12)**d**:koodta(ku:dte), (13)**dh**:dhona (dho:-  
ne), (14)**dj**:urudj (araz) ['arz], (15)**e**:ketna (ketne:) [kitna:], fauedeh (fa:ede:), bole  
(bol), (16)**ea**:beachna (be:cne), eeaud (yād), kirauea (kira:ye), (17)**ee**:topee (to:pi:)  
[to:pi:], (18)**ei**:neiau (neya:), beil (beyl) [bail], pe:sau (peysa:) [paisa:], (19)**eu**:keun  
(kyū) [kyō:], (20)**f**:turruf (taraf) [taraf], (21)**g**:geet (gi:t), (22)**g**:gullut (ghalat) [ghalat],  
(23)**gh**:ghur (ghar), (24)**h**:humaurau (hama:ra:), hauzir (ha:zir) [ha:zir], (25)**hg**:hgussa  
(ghusse:), (26)**hk**:hkurch (kharc'), (27)**i**:chirauna (c'ira:ne), *kkide* (qaid), (28)**j**:jangul  
(jangal), (29)**jh**:jhoolna (jhu:lne), jhauz (jha:z) [jaha:z], (30)**k**:kooch (ku:c'), (31)**k**:koob  
(khu:b), (32)**kh**:dekh (de:kh), khuyda (khay-de) [kah-de], (33)**kk**:kkeemut (qi:mat),  
(34)**l**:juldee (jal-di:), (35)**m**:tumaum (tama:m), (36)**n**:noukar (noukar), (37)**ng**:heaungh  
(heyā:) [yahā:], (38)**o**:ola (o:le) [o:la:], somwaur (so:mwa:r), ommur (omar) ['umr,  
umar], (39)**oo**:doosrau (du:sra:), moot (mo:t), soom (sum), (40)**ou**:choura (c'oure)  
[c'auṛa:], (41)**p**:paugul (pa:gal), (42)**ph**:p,hool (phu:l), (43)**q**:tuqseer (taqsi:r) [taqsi:r],  
(44)**r**:raunr (rā:r), cherree [c'haṛi:], (45)**rh**:daurhee (da:rhi:) [da:ṛhi:], (46)**s**:sub (sab),  
(47)**sh**:goshte (go:s't), (48)**t**:tuck(tak), choota [c'hota:], hutteur [hathiya:r], (49)**tch**:nautch  
(na:c'), (50)**th**:j, hoot, hau (jhu:tha:) [jhu:ṭha:], t, haun (tha:n), (51)**u**:pur (par), kudau  
(khuda:), (52)**w**:duwaut (dawa:t), (53)**x**:shux (s'akhs), (54)**y**:yuteem (yati:m), hy (hai),  
(55)**z**:hauzir [ha:zir], nuzzur (nazar), zumeen (zami:n), zaut (za:t) [za:t]

2. 上の綴字から明らかかなようにかなり一貫した表記法が採られているが、同一音を写すのに2, 3通りの綴字があるといった不統一も若干見られる。また、語頭と語中とは別々の綴字を用いている例も見られる。

3. 実際には区別されていたと思われる子音が区別されずに記されている。ただし、これがSahibのBHを代表しているからであろう。たとえば、①歯裏音とそり舌音: daunt [dā:t], dur [dar], ②歯茎ふるえ音とそり舌弾き音: pur [par], puckurna [pakaṛna:], など。

4. 実際の発音に即した表記をなそうとしたためであろうが、語の第一音節の短母音が記されていないことが多い。mheina [mahi:na:], sh, hud [s'ahad], drust [durust], jhauz [jaha:z]

5. Hadley がペルシア語・アラビア語の知識を有していたために、*k*, *kk* などについては実際の発音に即して書写していないことも考えられる。

6. 同一綴字が2～3の母音を表わしていると思われる例がある。① munshee [muns'i:] — muckhee [makki:], ② moot [mu:t] — mootee [mo:ti:] — oostaud [usta:d], ③ pinjrau — pida, など。

## II

1 (1) 名詞には数及び格による変化は一切見られない。① ooah ghoorau, ② ghoorau ko

(2) 文法上の性は存在しない。

(3) 数は名詞に数詞を先行させて表わすのが普通である。aut botel [a:ʰ bo:talē:] C D の文法篇には人間には単数形 (sg.) に loge [lo:g] を加え、その他には sub [sab] を加えて複数形 (pl.) をつくる、とある。loge を用いた例はあるが、sub を用いた例は見られない。ただし、sub sipauhee, sub sirdaur などにおける sub は「すべての」、ないし、「各々の」の意に用いられたものである。数詞と loge の両方を用いた例もある。doo juwaun loge

(4) 名詞は格後置詞の採否によって直格 (dir.) と斜格 (abl.) とのいずれかの格を採る。

(5) 直格形は主語、直接目的語、呼格に用いられ、斜格形は次に述べる格後置詞を従える。

2 (1) 格後置詞としては次のものが認められる。

(2) ne: これは俗謡の例とされるものの中に註を付したのが見出されるのみで、<sup>(1)</sup> その他の例文には全く見られない。

(3) ko: これは SH の [ko] と同義に、かつ同様に用いられているが、それとは若干異なる用例もある。essau kurna ko autchau ny [aisa: karna: ac'c'ha: nahi:] なお、これは後述の 6 の(1)に示す若干の後置詞を導く。<sup>(2)</sup>

(4) kau: これは SH の [ka:] に相当するが、変化しない。① gauea mheina kau hkurch kau hissaub, ② paudshauee kau bettee ただし、ka-wausta [ke: wa: ste:] などに用いられている ka は [ke:] と発音されている。

(5) sa: これは SH の [se:] に相当し、それと同様に用いられている。

(6) pur: これも SH の [par] に相当する。

(7) ma, mean: 例文中には 1 例を除き ma (me) のみが用いられているが、実際には mē: と鼻音化していたことも考えられる。<sup>(3)</sup>

3 (1) 一人称代名詞としては、hum ((sg)) 及び hum loge ((pl)) が用いられている。① hum ko, ② hum loge kau dustoor ただし、sg. gen (itive) では humaurau。なお、sg. については myn (mai), merau, mooj-ko の SH 形がほとんど用いられないものとして付記されている。<sup>(4)</sup> GH, HP, HG に見られる hamō: は、tumhō:, unhō:, inhō: などと同じく CD には全く見られない。

(2) 二人称代名詞としては、SH の [tum] 及び [tum lo:g] に相当する toom 及び toom loge が用いられる。sg. gen. には, tumaurau が用いられている。尊敬形の aup [a:p] は用いられていないが、<sup>(5)</sup> sauheb [ʃa:hib] で代用している例がある。SH の [tu:] 及び GH, HG

などに見られる古形〔tai:〕や〔tera:〕に相当する too, tein, terau はそれぞれ語彙篇にのみ記載があるが、<sup>(6)</sup> 例文中には全く用いられていない。

(3) 三人称/指示/代名詞には ooah((sg., dir))<sup>(7)</sup>; oos<sup>(8)</sup>-ko, -kau, -pur (sg., obl); ooah loge (pl., dir); oon loge ((pl., dir: obl)); oon<sup>(9)</sup>-ko ((pl. obl)) が用いられている。なお、CDにのみ見られるものとして ooah の女性形 ooe (pp. 150, 158, 160, 223), oosee -kau (p. 223) がある。ooee については、女性専用の感動詞<sup>(10)</sup>が代名詞的に用いられたものであり、oosee は〔usi〕と解すべきであろう。<sup>(11)</sup> 2の(3)で述べた ko が oos と結んだ例 oosko saut〔sa:th〕がある。

相関代名詞〔so:〕の用例はない。

(4) SHの〔yah〕に相当する三人称/指示/代名詞として、eah, eee<sup>(12)</sup>がある。これは(3)と同じく指示代名形容詞としても用いられている。斜格形を採った場合もそうでない場合もある。eah jagгах kau naum, is duneea ma なお、複数形の使用された例は見えず文法篇にもそれについての記述はない。

(5) 不定代名/形容/詞としては koe/koe/及び kooch/kootch/ がある。GHの ko, oo は見られない。文法篇には koe の斜格形が kissy と記されているが、koe naou〔na:u〕sa といった例も見られる。

(6) 疑問代名/形容/詞としては kone ((dir))<sup>(13)</sup>—kis ((obl)), 及び keea<sup>(14)</sup>が用いられている。keea の斜格形としては kai〔ka:he:〕が示されているが、<sup>(15)</sup> 例文中には keea sa bunnau hooa〔bana:hua:〕のように直格形が用いられたものもある。

(7) 関係代名/形容/詞としては, jo ((dir))<sup>(16)</sup>—jus〔jis〕がSHの場合と同様に用いられる。GHに見られる別形 joun 及び je, HG の jaun は見られない。CH<sup>(17)</sup>に見られる jusmoaufiq〔jaise:, jis tarah〕はすでに現われている。

(8) 再帰代名詞の用例としては次のものがある。① tumaуrau aup〔a:p〕kau shouq, ② aup ko, ③ aup na munsoobeh sa, ④ aup aup sa〔a:pas mē:〕ただし、その用法はSHと全く同様とは限らない。toom tumaуrau kaum auor autchutturah kurringa ny

(9) 上記以外の代名詞としては次のものが見られる。① sub loge, ② auor loge, ③ doosrau-ko, ④ eck deegur sa (e:k di:gar se), ⑤ auor kooch cheez

4 (1) 形容詞はSHと異なり、被修飾語の数・格に関係なく常に無変化である。形容詞の位置はSHの場合と同じである。

(2) 形容詞の比較もSHと同じく sa を用いて表わす。

(3) 過去分詞の形容詞転用の例も見られる。gauea mheina〔gaye:mahi:ne〕

(4) 基数詞は次のものがSHと若干異なるのみで、他はほぼ同じである。<sup>(18)</sup> 11 <agearrah>, 38 <aut, teess>, 41 <eck chauleess>, 48 <authauleess>, 67 <saute saut, h>, 89 <oonau-nubbee>, 92 <baraunubbee>, 99 <oon sou>

(5) 序数詞及び分数詞もSHと同一のものが用いられている。① p, hilau, ② doosrau wuqt, ③ teesrah p, haur〔pahar〕, ④ pauou〔pa:w〕, ⑤ dahur〔de:r̥h〕

5 (1) 不定詞、現在分詞及び過去分詞はSHにおけると同様に接辞 -na (-ne:)〔-na:〕, -ta

(-te) [-ta:], -a, -ea (-e:, -ya) [-a:, -ya:] を加えてつくられるが、常に無変化である。ただし, gulaabee ko hum bool gauee [bhu:l gai:] (p. 182), ooe aoutee [a:ti:] (p. 158) のように SH と同様に主語の性と一致した用法が 2 例のみ見られる。

(2) 活用形としては命令法, 直説法, 叙想法<sup>(19)</sup>が認められる。ただし, 叙想法は直説法の活用形を用いても他の表現形式を補う方法で表わされている場合がある。

(3) 受動態は SH と同じものは見られない。Hadley の説く 2 つの形式, すなわち, ①主動詞の語根+ho-jaouna [ho:ja:na:], ②主動詞の過去分詞+ho-jaouna, のうち①の用例が一つだけある。hooauee joldee chor ho-jaouta hy [hawa:i: jaldi: c'ho:ri:ja:ti:hai] (p. 173) なお, これは GH の〔主動詞の過去分詞+ja:ya:-ja:na:〕とも異なる。<sup>(20)</sup>

(4) 活用形には原則として, 人称・性・数による区別はない。ただし, hy [hai] の複数形 hyn/hyngh/ [hai] の例がある。(p. 224)

(5) 命令法については, Hadley は SH の二人称代名詞 [tu:] に対応する動詞語幹形のみを示しているが, 例文には SH の [tum] に対応する〔語根+o〕形も見られる。①jawaub da, ②eah sheeshee deckho SH の [a:p] に対応する -iye 形のものは 1 例も見られない。

(6) Hadley は 6 時制を認めている。すなわち, ①Present (dourta hy), ②Preter Perfect<sup>(21)</sup>(doura), ③Future (douringa), ④Preter Imperfect (dourta t,hau), ⑤Preter Pluperfect (doura t, hau), ⑥Future Perfect Subjunctive (doura hoinga)<sup>(22)</sup>の 6 活用形が例示されている。ただし, ⑥は SH の叙想法完了時制形に相当するものである。また, ④の例文は見られない。

(7) (6)の①はそのまま, もしくは, 副詞(句)を補って進行時相を表わすことがある。

(8) 現在分詞の名詞的な転用の例として次のものがある。tope chorta ko wuqt [top c'hortē waqt]

(9) SH の現在完了時制形は(6)の中には示されていないが, 2 例が見られる。

(10) 叙想法は(6)の⑥の用例が若干見られるのみであるが,<sup>(23)</sup>直説法の中にも次のように接続詞を用いるなどして表現されたものがある。auggur hum eah kaum deckha t,hau ny [na dekha: hota:]

(11) 複合動詞としては, ①主動詞の語根+補助動詞, 及び, ②主動詞の不定詞+補助動詞の 2 種が見られる。①bhaj dea [bhe:j diya:], ho gauea t, hau [ho gaya: tha:], ②lajaouna hoga [le:ja:na:hoga:] ただし, SH では今日①のみに用いられる補助動詞 [sakna:] は, ①, ②の両形に用いられている。<sup>(24)</sup>①kurna seckta [karne: sakte:], ②chul seckta hy [c'al sakta: hai]

(12) 接続分詞としては ka (ke) のみが用いられており, SH の [kar] に相当する語の用例はない。①laka [le:-ke:], ②khauke [kha:-ke:], ③jaouke [ja:-ke:]

6.(1) 格後置詞以外の後置詞としては, 次のものが見られる。①tuck [tak], ②tulluck [tala-k], ③ko-wausta [ke:wa:ste:], ④ko paus [pa:s], ⑤ko ooper [u:par], ⑥ko neechee [ni:c'e:], ⑦ko saut [sa:th], ⑧ko turruh [ki:ʔarah], ⑨ko bheeter [bhi:tar]

(2) 主要な副詞として次のものが見られる。①oot,her [udhar], ②kidher, ③heaungh, ④hooaungh, oohaun, ⑤khaun [kahā:], ⑥jhaun [jahā:], ⑦tub, ⑧jub, ⑨kub, ⑩p, heer, ⑪hummeish, ⑫kubhee, ⑬kubhee kubhee, ⑭aunder, ⑮nuzdeeq, ⑯door, ⑰augah peechee, ⑱audj, ⑲kul, ⑳jee, ㉑haungh, ㉒ny, ㉓mut, ㉔nhein [nahi:], ㉕bhote, ㉖zeadah, ㉗auste [a:histe:]

(3) 接続詞としては次のものが見られる。①auggur,uggur [agar], ㉘auggur-cheh [agarc'i], ③jud [jo], ㉙tud [to], ㉚ka [ki, kih], ⑥auor [aur], ⑦leekun [le:kin]

7. 文例が sahib の生活に関連した会話案内にほぼ限られ、他はごく簡単な風俗・習慣の紹介のためのものであるため、文章は短いものが大多数である。語順や構文上、SHとの間に差異はほとんどないものと考えてよい。

8. 資料面で十分とは言えないが、CDに記録されている語彙は、今日いうところの Urdu 語のそれに非常に近いもの、と説明できよう。ただし、それは Mir Amman の 'Bagh o Bahār' ほどにはペルシア語由来の語彙を多く含んではいないが、Lallū ji Lāl の 'Singhāsan Battisi'<sup>26)</sup>に含まれている Tatsama 語彙は含まず、それに少なからず見られるペルシア語由来の語彙は大部分含んでいる、と言えよう。その語彙集に収められている名詞及び形容詞の35%強はペルシア語由来のものである。その中には、furhung [farhang], koodbeen [khudbi:n], pinhaun [pinhā:], purwaungee [parwā:ngi:], などヒンディー語にはほとんど見られない語彙がかなり含まれている。一方、ベンガル語ないし東部地方の言語の影響はほとんど見られない。わずかに、gauch [ga:c'h], ny [nai], tum tum [təm təm] などがその例として数えられる。

以上の2点は、S.K. Chatterji がBHの語彙の特徴として述べている点<sup>27)</sup>を参照すると甚だ興味深いものがある。その特徴は、代名詞や動詞の変化・活用に東部ヒンディー語、ビハール諸語、ベンガル語などの影響が見られることと併せ考えれば、CD以後のベンガル語地域でのBH使用者の増加に因るものであることは明白になる。

### III

1. Sahib の手になっていることや、文例及び語彙数が不十分なために、18世紀後半のBHを検討する上でCDが資料的に不満足なものであることは否めない。しかし、BHがJargon（連絡語・媒介語）として生まれ成長してきたことを考えるならば、そのような制約にもかかわらず、CHと対比して吟味してみる価値があろう。

2. BHは連絡語・媒介語として、SHが保持してきている文法上の性や名詞変化・動詞の活用等にみられる人称・数の区別、などを廃したり簡略化したりする形で出現した。これらは上に見てきた通りCDとCHの言語に共通の特徴である。しかし、BHはその使用される範囲が広がり重要性が増すにつれ二つの傾向を示すようになってきた。一はCHにおいて叙想法や受動態などがCDよりも整った形で見られることに代表される。これは媒介語にせよ言語としての機能を果たす上で不可欠な文法組織の整理がなされることと、文法の整理にあたっては同時代のS

Hがやはり模範となってきたことを意味する。

3. 他方, Calcutta Hindustani には名詞や数詞に付加される enclitic ((tho)) が採用されており, 代名詞や動詞の活用形にその使用地域や使用者の言語や母語の影響も見られる。それと同時に, 名詞・代名詞の複数直格形と斜格形 ((tum log kā, tum logō kā)) の併用や方言形 ((itnā, etnā, ettā)) の併用など, 今なお未整理の点もかなり見出される。これらは連絡語・媒介語としての「寛容性」から生ずる混乱や多様性(不統一)である。このことは文法上の規則に限らず, 音韻面や語彙面にも等しく見られるところである。また, この Jargon の使用者の構成に大きな変化があったり, それを常用したり, 母語に代えたりするような状況になれば,<sup>(28)</sup>この種の混乱が増大することは必至である。多数の無学文盲の人たちにも習得されやすい文法構造を持った言語は確かに便利なものに違いない。だが, このことはその Jargon の存立を保障するものではない。でも, 共通語としての高度の発展を約束するものではない。

4. S. K. Chatterji の説くように, BHが従来インド亜大陸に最も広く普及した Hindustani の一種であることは確かである。だが, 彼の Simplified Basic Hindi<sup>(29)</sup>に関する主張は上述の背景を理解した上で検討すべきであろう。

1931年に彼は, Hindustani が名詞の格変化・性の区別・動詞活用形などの複雑なことから真の民族語・国語 (Rāṣṭra Bhāṣā, Qaumi Zabān) となる上での困難を指摘し, 併せて語彙の面でペルシア(アラビア)語の影響を受けた Hindustani の Urdu Form についても批判を加え, 真の国語としての地位を得るには Hindustani が文法の簡略化された, いわゆる, Bazar Hindustani にある程度譲歩すべきことを説いている。<sup>(30)</sup>

5. BHの「美点」を応用したこの主張はその後, さらに明確な形で “Indo-Aryan & Hindi” などに展開されている。その Simplified language (-simplified in its grammar) の特徴は彼自身の言葉によると次のようになる。

This widely understood common speech then would be, Romanised, Sanskritic, ‘Hindi’ Hindustani, with a universally recognised Perso-Arabic element,...<sup>(31)</sup>

文法の簡略化は, 名詞の複数形を語形変化によってつくらぬこと, 文法上の性を廃すること, 動詞活用形に人称の区別をなくすこと, 動作格 -ne とそれに関連する構文を廃すること, などに要約される。<sup>(32)</sup>

6. この Simplified Hindustani (Simplified Basic Hindi=SBH)<sup>33)</sup>はインドの国語問題の解決に大いに役立つかのような印象を与えるが, その主張は次のような発言に見られる立場からなされていることを確認しておく必要がある。...Its regional character is still there, and this gives it an advantage to the speakers of it over other Indian citizens.<sup>(34)</sup>

ここには生臭い Regionalism, あるいは, Provincialism がちらりと顔をのぞかせているといっても過言ではなかろう。それはまた, 「国語」問題を火急の事とはせず, インドの諸言語に対する英語の優越是認の態度<sup>(35)</sup>とも関連するものと思われる。

7. そればかりでなく純粋に言語上の問題として考えても, この主張は説得力に欠ける。ま



ず、これは一方では名詞の複数斜格形の使用や叙想法の完備といった点で BH と異なるほか、<sup>(36)</sup> 語彙の面でも上記の方針を採るがために安定を得るには至らぬ。<sup>(37)</sup> 他方、Hindustani (Hindi あるいは Urdu の形で) が前代から継承し、過去数百年間にわたって磨き上げ蓄積してきている Tadbhava, あるいは, Deshī 語彙を Sanskritic なもので置き換えたり、慣用句や諺などの豊かな表現力を捨て去ることになる。このような遺産の相続を拒否せぬにせよ、それに消極的な態度を採ることは、求められているものが Jargon ではなく、National Language であるだけに致命的な欠陥となる。

8. 語形、語法、語彙の面ばかりでなく音韻面にも等しく注意が向けらるべきである。Tadbhava 語彙や Ardha-Tatsama 語彙に見られる Hindi の音韻の歴史に学ばず、Sanskritic 化の方向に進むことは賢明ではない。

上述のような種々の理由で、SBHを仮に国語として位置づけるにしても、学校教育を媒介としなければその確立は望めない。BHの普及はSBHの確立を保証するものではない。CHに見られる Bihārī, ないしは, Pūrabi 要素の示す意味を考えるべきであろう。

Hindī が教育の場で然るべき扱いを受けるならば、SBH という Concession Speech<sup>(38)</sup>に頼らなくても国語問題は解決に向かうであろう。Hindī が国語として定着しつつある現在、真の問題が残っているとすれば、Rāhul Sāṅkṛityāyana の説いた「Hindī の母体である Kauravī の探究と活用による表現力の増強」<sup>(39)</sup>ということであり、その方法の近代インド諸語への適用ということである。

## 註

- (1) Observe, the ne in the first specimen is an expletive, but not inelegant, as it is used by the gentry, humne, tumne, oosne, ... CD p.207
- (2) CH, § 34 を参照。
- (3) CH, p. 222 を参照。
- (4) CD, pp. 7~8
- (5) 語彙集の中にも記述はない。
- (6) それぞれ, 'never used but to an inferior' (p. 104), 'to an inferior' との註。
- (7) GH, wōh, HP wōh, HG wūh
- (8) GH, p. 65 の oos の oo は明らかに長母音を表わしているが, HP では os と短母音 (p. XXX)。
- (9) これも GH では oon とあり, oo は長母音, HP (p. XXX) では on と短母音。
- (10) GH, p. 248
- (11) CH, p. 221
- (12) GH, HG では yih.
- (13) GH, HG では kaun.
- (14) GH では ke, a, HG では kyā.
- (15) CD, p. 11.

- (16) GH に見られる joun 及び je は認められない。HP, juon; HG, jaun.
- (17) CH, § 64 参照。
- (18) 11 (GH, egaruh; HP, igaruh; HG igárah), 38 (GH, ut,h tees; HG, aṭhtis), 41 (GH, ektalees; HG, iktális), 48 (GH, ut,h talees; HG, aṭhtális), 67 (GH, sutsut,h; HG, satsaṭh), 89 (GH, nou, asee; HG, nau, ásí), 92 (GH, banwe; HG, banawe), 99 (GH, ninnanwe, HG ninánawé)
- (19) GH は ①Conjunctive Present [ma:re:], ②Preterimperfect [ma:rta:], ③Preterperfect [ma:ra:ho:we:], ④Preterpluperfect [ma:ra:ho:ta:], ⑤Future [ma:ra:ho:we:ga:] を認めている。
- (20) GH, p. 117
- (21) GH はこれを Perfect と呼び, (9)の現在完了時制をPreter Perfect と呼ぶ。
- (22) hoinga, もしくは, hoga. CD, Vocabulary (Hindustanic and Eaglish), p. 18 HG, haige を参照 (p. 43).
- (23) HP では [bo:lte:hō:ge:] が, HG では [bo:lta:ho:we:] と [bo:lte:hō:ge:] が加わる。
- (24) [c'al sakū:ga:, c'alne:na:sakta:tha:] HP, p. xxxvi 及び HG, p. 131 を参照。
- (25) HG, jad, tad を参照。p. 68
- (26) もっとも, Shardadevi Vedalkar は, この言葉を Rekhtā と呼んでいる。The Development of Hindi Prose Literature in the early 19 th Ceutury, Allahabad, 1969, p. 63
- (27) CH, § 67
- (28) CH, p. 191
- (29) IAH, Lecture IV; Appendix III
- (30) CH, p. 191
- (31) IAH, p. 258
- (32) IAH, pp. 259—260
- (33) IAH, pp. 307—315
- (34) IAH, p. 228
- (35) IAH, pp. 230, 266
- (36) IAH, p. 311
- (37) たとえば, dhan daulat-ma:lmatta:, puraska:r-ina:m, adhika:r-haq, abhya:s-a:dat, など。  
(pp. 308—315)
- (38) IAH, p. 264
- (39) Rahul Sankrityayana, Aj Ki Samasyaen, Allahabad, 1945, p. 40